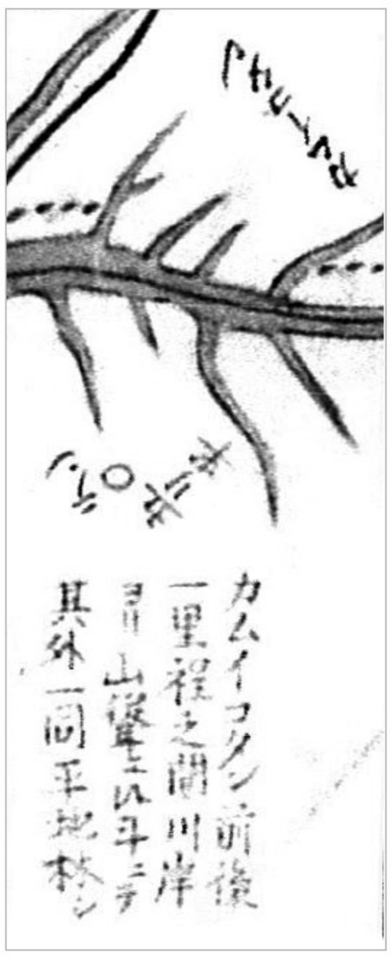
断章
旭川のアイヌ語地名研究 ⑮
高橋 基

―ハルシナイから上流の地名⑤―

ハルシナイから上流で、丸木舟でカムイコタンまで下る時の最大の難所が、**掲載地図**のレーコロプィラ（re-kor-puyra 名前・を持つ・激流→「有名な激流」の意味）であった。

文化四年（一八〇七年）十月十四日、近藤重蔵が乗っていた丸木舟が転覆破船し、一〇〇間（約一八〇メートル）程下流に流され、御朱印まで濡らしたという有名なエピソードがあるが、その転覆した場所がこのレーコロプィラであった。昔は、近藤重蔵が丸木舟で転覆の難にあったのは、カムイコタンとだけ知られていたが、近藤重蔵自筆の「金銀遣拂帳」（『近藤重蔵蝦夷地関係史料二』）で、「レイコルフエラニテ破船」との記述から、転覆破船した場所が、このレーコロプィラと判明した。近藤の表記は、「レイコルフエラ」であったことも明確になった。

なお、近藤重蔵は、十月一日に天塩から天塩川を溯り、上流のノカナンから比布のタナシに山越えし、比布の番屋に宿泊、十月十三日に旭川のチユクベツブト（現・忠別川川口）の番屋に宿泊した。近藤はこの間の川筋図を、約十六センチメートル幅の巻紙に記録し残した（当連載②参照）。この川筋図は、現存する当地方最古の記録であるが、レーコロプィラでの丸木舟の転覆によって、用紙や矢立などの流失等で、旭川以降の記録は残されなかった。文化期の石狩川流域の地誌を知る貴重な記録が中断したのは、誠に残念なことであった。



①近藤重蔵「蝦夷地図」（部分）

②レーコロプィラを下る

写真①は、文化四年に近藤重蔵が作成した『蝦夷地図』の写図（高木崇世芝氏旧蔵）のカムイコタンの部分である。「〇テン　五リ半」とあるのは、「〇テン・」は、「〇テシ・」の誤写で、「五リ半」とあるのは、旭川のチユクベツブトの番屋からの距離を表示したものである。十月十四日、チユクベツブトの番屋を出発した近藤重蔵一行は、レーコロプィラで丸木舟が転覆し、ハルシナイで露宿したと一般的に思われていたが、『蝦夷地図』によって、カムイコタンのテシ（tes 岩梁）で露宿したことが明らかになった。「テシ」の下部の書き入れは、「カムイコタン前後一里程之間川岸ヨリ山聳エ候斗ニテ其外一同平地林シ」とあり、これは近藤重蔵のカムイコタンの所見である。

さて、当連載⑰で、明治十六年九月十一日に、樺戸集治監の調査団一行が、「ウシ、ヘツ」（現・牛朱別川）からの帰途、このレーコロプィラの危険水域を下る際の調査復命書の緊迫感溢れる文章を紹介する旨を約した。左がその復命書の当該部分で、転覆の危機感迫る文章である。

午後四時頃、「**ケイコロフイラン**」（註―レーコロプィラの表記）ノ荒瀬ヲ落スニ臨ミ、暴虎馮河ノ気勢ヲ帯ビタル如キアイヌ畏縮ノ色ヲ顕シ、船頭ニ祭ル「イナヨ」（註―イナウ inaw 木幣）ヲ戴キ、「**ハクカ、モイ**」（註―ワッカウシカムイ wakka-us-kamuy 水・に住む・神→水の神→石狩川の神）ヲ祈リ水中ニ投シ、舷ヲ叩キ激浪ヲ潜ル再三再四、一葉既ニ水溢レ将ニ沈没セントス。其危険実ニ名状スベカラズ、漸クニシテ岸ニ達スルヲ得。一行ハ眉ヲ開キ稍安神ノ色ヲナセリ。実ニ此行最大一ノ危険ナリキ。午後五時頃「ハルシナイ」ニ着ス（以下省略）

写真②は、昭和六十三年七月二十五日に、四人乗りのゴムボートで、レーコロプィラを下った時のものである。季節・水量により状況が異なるが、ここの大波にはやはり恐怖を感じた。

次回は、**掲載地図**のトウレプサラニプと、その位置関係からレーコロプィラの場所も再検証する。（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します